

化学と接し続けること: 理学的な好奇心と実社会応用への興味

林ゆう子 (東京工業大学産学連携推進本部 産学連携コーディネーター)

進路決定のきっかけ

化学を勉強しようと決めたのは10歳。物質が反応して色が変わる、違う物質ができる面白さに惹かれました。徐々に「色、光」への興味が強くなり、大学院では有機光化学の研究室に所属しました。卒業後は、実社会で使われるものに接したくて化学メーカーに就職しましたが、育児休職中に教授から大学に戻るよう声を掛けられ、大学教員の方が子育てしやすいとの判断で大学に戻りました。その後、基礎的研究よりも実用に近いことに接していきたいという思いが強まり、大学教員と企業研究者を繋ぐ現職に異動しました。

仕事の内容とやりがい

現在の産学連携は、本学教員の知見や技術を実社会で産業化することを目的とした裏方で、教員と企業研究者とが共同で研究を進めることを手伝っています。研究内容だけでなく、特許などの知的財産や契約にも関わります。これまでに、企業、大学研究室、産学連携と仕事を変えましたが、いずれの職でも、最先端の科学(特に化学)に触れていることが自分の知的な好奇心を刺激し続けています。また、多くの研究者や学生、企業の実務者とやり取りをし、科学に限らない世の中の色々な面での動きを感じとることで、自分の視界を広げています。

仕事と家庭のバランス

父が他界して専業主婦だった母が働き始めたのが、高校生と主婦といった2つ以上の顔を時間配分して生活する私の最初のトレーニングだったかと思います。その後、母の大病、自分の病気、就職、結婚、出産、転職、子育て、子供の大病など、その時々ですべき顔の内容と数が変わりましたが、どの場合でも、短期的にすべきことと長期的にやりたいことを頭の中に列記して、最も自分が効率よく動けるように、掛かる時間と労力を考えて順序をつけ、1つ1つこなしていく「バランス生活」をしてきました。子育て時期は、地域密着型生活で乗り切りました。

進路選択に対してのメッセージ

進路選択には、想定した自分の将来像から逆算して今何をすべきかということで選択する方法と、今興味を持つことや自分が浸かりたい分野から選択する方法があると思います。勿論、その両方が混ざった場合もあるでしょう。私は、制約の中で興味を満たす方向はどちらかを見極めることを大事にしてきました。進路選択の第一歩である大学とは、就職への通り道ではなく、得意な分野、興味のある領域について先人の知恵を取り入れつつ新しい方向性の研究の中に身を置く場所だと思っています。

<林ゆう子(はやしゆうこ)プロフィール>

女子中学・高校 → 東工大理学部化学科 → 東工大総合理工学研究所電子化学専攻(修士課程) → 大手化学メーカー(解析・分析部門立ち上げメンバー) <結婚・第一子出産・育児休職、米国在住> → 東工大資源化学研究所教員 <第二子出産> <論文博士(理学)取得> → 現職

